

ダモイ（帰り）を早めた風土病

千葉県 仲澤豊春

私は昭和十六（一九四一）年十月二十日補充兵教育召集で応召。そのときは奉公袋と風呂敷包を持って、隣近所には「秘密にしろ」とのことで、ちやうど夜逃げ同然で佐倉五十七連隊に入隊し、そのままいつの間にか教育召集から普通の召集に切り替えられてしまった。

翌年四月三日、北支派遣独立混成衣三〇四三部隊が編成され、その一員となった。

東京初空襲のときは下志津兵舎で出発待機中であった。五月十七日内地を出発、釜山經由で北支山東省泰安県泰安に到着。その後は萊蕪、済南、青島等と山東地区の、山東作戦に参加し、昭和十八年河南省開封付近、黄河南北岸の鉄橋整備に参加した。そのときは弘第一五六二五部隊であつ

た。

翌年二月、関東軍南下転進の後、私の部隊は満州へと異動し、吉林省吉林の北方の小さな町大平原で来る日も来る日も対ソ戦争のためにタコソボ掘りと演習であつた。

八月八日、ソ連参戦で私たちは完全軍装で毎日毎日ソ連軍を迎え撃つためにトウモロコシ畑の中で生のトウモロコシをかじりかじりの行動であつた。私はそのときほど生のトウモロコシが美味しく感じたことはなかつた。

一週間ほど行動して新京（長春）の駅に着き、八月十五日、敗戦を知らされました。そのとき若い血気の将校たちは「俺たちは負けぬ」と、何人かの将校たちは駅ホームで自決した。その姿、が今でも目に浮かびます。

それから間もなく公主嶺に集結して飛行機の翼の下に軍旗を並べ武装解除された。その日は八月二十三日と記憶している。

九月十八日、私たちは黒河省孫吳に到着した。

その日は大雪であった。孫呉での作業は毎日毎日入ッするため日本人の消毒と入浴等の雑役作業であった。その作業も三月まで続いて私たちにも入ッの日がきました。

十二月一日、寒さのために黒竜江は結氷し、ソ連軍が氷の上に鉄路を敷いた。私たちは雪と氷の上を少しばかりの荷物を持ち徒歩でブラゴエシチェンスクの駅に着き、二階造りの貨車に詰められ、北へあるいは西へと走り続けた。一カ月くらい貨車に乗せられ着いたところがイランの北カスピ海（裏海）の東岸の小さな町クラスノボドスク収容所に着いた。その日は十二月三十一日であった。

その町は対岸のバクーの町から原油を船で運び、そこから鉄道で運ぶ所であった。

屋根だけが地上に出た収容所で、室内は木材で造った三段のバタリ式の鶏舎を思わせる宿舎であった。いよいよ作業が始まった。その作業は山から石を切り、それを積み上げ二階三階とアパー

トや劇場等の建設作業であった。そこにはトルコ人とドイツ人等同じ作業場で働いていた。

私は昭和二十二年四月ころであったか発熱し、診断の末手術とのこと、病名が分からないから骨髄を取り出し検査するとのことであったが、私は不安でいっぱいであった。麻酔注射もなく、木に穴をあけるような錐で胸骨に穴をあけて血液を取り出し検査したが、いま一回取るとのことで同じ方法で二度まで胸に十字の手術をされた。その結果カラサール（山東熱）と病名が発表された。それは風土病であった。そのとき、アメリカの薬で、よい薬といい、一回注射されると一週間くらい動けないほど痛い注射であった。それを五回くらい注射された。しかしそのころから熱が下がり、少しずつ快方に向かった。

七月ころであった。「ヤボンスキー、ラボーター、ニヤート、クーシャジ、ニーハラシヨードモイ（日本人は働かなくていい、帰るのだ）」と言っていたが、しかし嘘と泥棒の国であると

思っていた。また、ナホトカの港から一万四千キロも離れた遠い所、帰すと言われながら、嬉しいやら不安やらの気持ちだったが、いくらかの望みを持っていた。

ところが、七月末、突然私に、明日列車に乗り帰るとの話。人員は何人か、または病人のみか分かりませんでした。それは病人のみでした。何せ夏の暑い最中、列車に乗った翌日ころより砂漠の中を走る鉄道ゆえ、暑さはこの上もなく、呼吸するも苦しい暑さで、生ぬるい水でタオルを浸し口に当てて何とか暑さをしのいだ。そんな日が四、五日続いた。

約一週間でタシケントという町に出て青い農場を見たときは生き返った思いでした。タシケントの町に来るまでの間、幾度となくラクダの群と幾条となく立ち上る竜巻の光景を見ました。

列車は毎日毎日北へ北へと走り続け、シベリア本線と合流した。私たちはノボンビルスクという町でシラミ退治のため衣服の消毒をし、洗面器一

杯の湯のシャワーを浴び、久しぶりのあか落としをしたが、これは体を濡らし拭き取る程度でした。ここで一日休養して翌日シベリア本線を一路東に、一日三百キロメートルから七百キロメートル走り続けた。八月三十一日待ちに待ったナホトカに無事到着した。このナホトカに着くまでは、幾車両となく逆送されて行く日本人とすれ違った。その人たちは反動分子とか名をつけられた人たちとのことであった。

ナホトカの集結地には第一、第二、第三と収容所があり、そこには若い人たちが夢中になって赤化思想教育をしていたが、帰るための手段であろうか、または本当に共産主義になったであろうか、私には異様に映った。

私は幸いに病人ゆえ第一収容所から第三収容所を通り、その赤化運動員には言われるままにその通りとばかりあしらい、無事高砂丸に乗船することができた。

前日は台風とのことで日本海は波が高かった

が、それでも無事に緑濃い両岸に映える松の木、細長い舞鶴港に着きました。

幾年ぶりに見る故国、懐かしさの余り涙がいつの間にか両ほおを濡らして、今までの苦勞も夢と消える思いでした。

引揚業務も終わり最後の夜であった。私たち二十人に一升瓶一本が配られた。それが故国に無事帰って何年ぶりで飲む祝いの酒であった。久しぶりに飲む酒は五勺で充分で、故国に帰った喜びと安堵の気持ちで夜の更けるのも忘れて語りまた唄った。

昭和二十二年九月十二日、故郷の人となる。

抑留中栄養失調または盲腸等で一緒に病床に並び、帰らぬ人となった方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

抑留中の風土病も帰国後は再発することもなく、今日まで健康で働いております。

【執筆者の紹介】

氏名 仲澤豊春

生年月日 大正九年一月二十四日生

出生地 千葉県君津郡関豊村豊岡

現住所 千葉県富津市豊岡

軍歴 昭和十六年十月二十日東部第六十四

部隊に入隊

衣第一百一大隊転出大陸に転戦

満州国新京にて敗戦

入ソ年月日 昭和二十年十二月一日

引揚年月日 昭和二十二年九月八日

在ソ期間 一年十カ月

収容地名 クラスノボドスク

復員後、農業に従事し、全抑協富津市役員を務める。現在も健在。

(千葉県 伊藤 千次)